

つれづれなるままにーとあるおっさんの四方山話

第31回 そろそろ老いを迎えるにあたって

とあるおっさん

農村工学研究部門メルマガ 108号のこの記事、第15回「とあるおっさんの今の仕事とこれから」の文末で、再雇用を終えた筆者のこれからについて、

「もう暫く農村工学研究部門の仕事を手伝わせて頂くことになりました。四方山話も、書ける範囲で話題の範囲を拡げて続けていこうかと思っています。」

と、挨拶させて頂いた。それから2年を経て、「もう暫く」の期間もそろそろ終わろうとしている。これで、いよいよその記事の前ページに綴った「再雇用も終えた筆者のこれから」を実現できるかと思いきや、コロナ禍でそのようにはいかなくなってしまった。

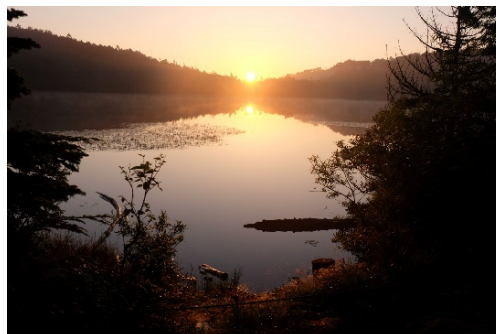
日々コロナと格闘されている医療関係者の方々や、生活を直撃されている方々からは、「定年後の爺さんが何を気楽なことを」とお叱りを受けそうであるが、筆者としては何とかアフターコロナに自分の夢の実現をつなごうと、画策をめぐらしている。

ともかくは、体力の維持、どんな状況になろうともこれは基本となる。筆者はもともと運動が苦手、小学生の時からかけっこをすれば確実に断トツのビリ、球技をすれば、落とす、当たらないの連続、当人としては全力を尽くしているつもりであるが、ボールを捕ったりバットに当てるのが当然の人から見ると真面目に競技しているようには見えないらしく、当然ながら非難の対象となり仲間外れにされる。

ところが、中学校の全校マラソン大会のときであった。筆者が自分としては普通に走ってゴールしていると、後からゴールして来た同級生が筆者を見て唾然としている姿を見た。遠足の時（筆者の通った中学校では、初級向け登山コースを歩かされた）は、息を切らす同級生をよそに涼しい顔をして歩いていた。さすが幼少時は山奥で育っただけのことはあると、我ながら感心していたが、ふと、自分にも人並みにできるスポーツ種目があることに気がつき、山を歩くようになった。なお、山で筆者が最も幸せを感じる時間はウィスキーを飲みながら迎える夕暮れと、夜明けである。

山で迎える朝は筆者にとって至福のとき

山頂近くの湖で





3000mの天空で

さて、それから数十年を経て、走るのも球技も苦手なのは変わらない。とくに走ることに
ついては、最近はその自体が筆者にとっては危険行為となっている。たとえ目の前から電
車が発車しようとしていても駆け込み乗車はしない。したがって筆者が体を使うことで残っ
ているのは歩くことだけになってしまった。同じ歩くにしても山を歩けばそれなりに体力
を使うのであるが、コロナ禍で他県への移動を自粛している中、筆者が住む茨城県の山に向
かおうとすると、県内には山歩きの対象になる山が少ない。そもそも 108 号の記事で綴っ
たように、筆者のこだわりである公共交通と徒歩だけで出かけることを原則とすると、茨城
県の交通事情では、相当の努力をしないと麓にもなかなかたどり着けない。仮に自家用車で
行ったとしても、すでに高齢者の仲間入りをした筆者が、山を歩いた後に車を運転して帰る
のはかなり心許ない。

晩秋の茨城県奥久慈の山

山麓の集落を眺めながら
人気のない山道を歩く



そこで、ともかく当面は平地でも何でも、毎日違う道をできる限り 10 km を歩くことを目
標とした。ランニングを日課としている人から見れば大した運動には見えないと思うが、運
動というよりは写真撮影などの楽しみも兼ねてである。

国土地理院の地図（スマホ）とコンパクトカメラを持って、ぶらぶらと歩くこと 3 時間、
カメラを向けるのは、畑や田んぼの他、鎮守の森やお地蔵さんそして土地改良記念碑、以前
写真を撮っていた所と重なれば、同じ角度の写真など。この辺は 108 号で綴った通り。そ
して、これからは 128 号の記事を補うように筑波山にもカメラを向けることにする。

土地改良記念碑めぐり



整備された農地と記念碑

(おそらく農工部門に二番目に近い
土地改良記念碑、干拓地の文字がある)



街に取り込まれてしまった
土地改良記念碑



+

時間を経て、同一地点でほぼ同じ角度の写真を撮ってみる



農林団地のサクラの成長 1980年と2020年

※農村工学研究部門内の同一地点新旧比較の写真が96号の記事にあります。

当面はこんな方針で、そろそろやって来る老いと闘いながらアフターコロナに人生の楽しみをつないでいこうかと思っている。

その結果を、今後も、この欄で綴る機会を頂けたら幸せだと思うこの頃である。



結局はこれを楽しむ
ことが目的

(写真は筆者撮影)